時流潮流　寄稿

白井　浩子

一緒に考えましょう、再生可能エネルギー政策への転換②　―私たちが身近に取り組めること―

今回から、「メタン醗酵設備を自分たちで作り、有機農業とメタンガス発電を進める」という活動についての報告です。

きっかけは、「メタンガス利用の研修会を埼玉で開くから参加いかが」という投稿が、或る農業関係のメーリングリスト（ML）に載ったことです。ちょっと話はそれますが、ご承知でしょうか、世界で農業が、主にアメリカのアグリビジネスに牛耳られている状況があります。でも、他方ではそれに対抗して健全な農業を発展させようという世界での運動もあります（健全とは、経済価値を目指すだけでなく、地域の環境も整え、文化も大事に、という意味です）。「牛耳る」とは、「種子も、農薬も、肥料も、その企業から買い続けるように余儀なくされる」という、いわゆる「緑の革命」といわれる内実です。後でお話します。

ともかく、その農業関係の ML に上記のメタンの投稿があったので、これこれと思い、皆さんに呼びかけましたところ、川崎医療短期大学の姜・波（きょう・は）教授（女性）が賛成してくださり、大人二人ですが何だか遠足のように楽しく行ってきました。まだ、日差しの暑い夏でして、夜 11 時に岡山駅前から夜行バス、明くる日研修会に参加し、その夜もまた夜行バス、という強行軍でした！

何と全国から 50 人以上も参集しました。ずいぶん若い人も多かったです。ただの農家の中にその 50 人が上がりこみ、畳に座って解説を聞きました。大変気に入ったのは、「私たちは地域で人々の繋がりを作りつつ、できるだけ物事を自分たちでやります」という点です。それでむしろあえて大規模にしません。大企業が参入してくると、小回りの効く自分たちのアイデアも生かされにくく経費的にも問題もある、というのです。自由に質問などしながら、パワーポイントの映像を参考に、醗酵槽を作り上げていく過程の解説を聴きました。

参集した人々の中には、近く仲間とやり始めよう、という人がきっといるだろう、と思われました。私の面白かったのは、最少規模は、との質問の答えで、10 リットルほどの容器で試みた、ということです。これはぜひ、やってみたいと思いました。

醗酵層は、小規模なら円筒形です（連載 1 回目の右下の図が槽の外観）。建設作業はまずは、醗酵槽を作る、と決めた地面に、円形床が置かれる穴を掘ることです。その底から円筒形の壁をコンクリートで立ち上げる、上部のドームをコンクリートでつくる、などなど。コンクリートを流し込む木枠など、何回もみんなで使い回しするように保管しておきます。作業は、近隣でメタンガスを利用しようとする人々が協働でします。槽の規模が 10 立方メートル規模で、およそ 20 日程の工程です（数人の共同作業で）。工事は集中して進めるので、寝泊りも一緒にします。大掛かりな工作という感じで楽しい気がしました。

次からは、規模（醗酵槽、投入廃物、など）や、ガスや液肥の利用の実際、国内外でのエネルギー自給、建設の実際など、順にお話します。

白井浩子氏

1943 年生まれ横浜市出身
元・岡山大学教員（生物学）、第 14 回猿橋賞受賞、現在、余剰進化論を提唱
(財)おかやま環境ネットワーク理事